



卷之三  
二七三

文化壬申仲春

草鞋之記行

其流

273



了性人ふたあは  
たひまはるる勢  
道くや一歳帰る事  
白ふくも地と素月誰  
えまらるる

江都のり  
幾多のり

花を花なり田舎  
江都

藤堂より花と古利根の  
あかぬく先と水と船  
の館柳のりあり  
あかぬ

いさよ歸を  
川に母を春

形こそ海縁を向て  
年を定るまよ

不毛雨はさめ

いさよ歸を

川に母を春

と戯れ侍りし以取れ  
友とともあけしやうも

いさよ歸を

いさよ歸を

いさよ歸を

いさよ歸を

いさよ歸を

いさよ歸を

いさよ歸を

いさよ歸を

いさよ歸を

いさよ歸を

いさよ歸を

いさよ歸を

いさよ歸を

いさよ歸を

いさよ歸を

いさよ歸を

いさよ歸を

いさよ歸を

いさよ歸を  
川に母を春

寺澤より北見

さうみお若てはまふに  
在連川の東に木あはれう  
とて葉乃や木原の葉は色  
天丈の穴形波とや都交  
今あ故あまをさすいし所  
形波の度まゝ路は踏し  
あの草原ふまじしをま  
笑ぬた

七将たむらゝかまや  
ナニ神

海お那坂

あの坂の南あまをりし  
都交は後徳成苑の巻居  
四五梅より

雲を山は流る所

さうみお若てはまふに

寺澤川

古き野川とせし  
はし國史より

塵復は道真准后の伝東  
次あはれしあはれしあはれし  
はしあはれしあはれしあはれし  
の六月は故のまふりし  
秋や此神のまふりし  
おまを山は流る所  
さうみお若てはまふに  
まふりしあはれしあはれし  
あはれしあはれしあはれし  
遠くは川下の目取まふりし  
寺澤川のまふりし  
あはれしあはれし  
あまの宮をまふりし

法二米

何となくと舞々たる神に  
く先うもきり

雨のふりももらひて

市中争ひの意のいへ

たふれりあふん

雀のさあけし法を北の社に

あつ世氏の御神やわし

紀世史を崇やしとや

才者のあはれ急みの衆

くしは

大の疑りもあふん

古くは曉寅の下刺半に

かきとこも雨あふん

はくも衆あふん

あや

十と下ふり行て民衆の里

とふも法倉大双能なま

こまの法書に記し

衆衆といふさ

あやとおいひ

はくも

をす隔

かま才基法合義の記あり

基法

はくも

六月をり

あつと志を

のの

はくも

あつと

あつと

あつと

路の末へさびしき  
ふもはまのり

昔もはまのり  
の宮をうらむる

ふのふのふと遠く

ふのふのふと遠く

利根川のほとり

利根川のほとり

利根川のほとり

利根川のほとり

利根川のほとり

利根川のほとり

利根川のほとり

利根川のほとり

利根川のほとり

利根川のほとり

利根川のほとり

利根川のほとり

利根川のほとり

利根川のほとり

利根川のほとり

利根川のほとり

利根川のほとり

利根川のほとり

利根川のほとり

利根川のほとり

利根川のほとり

利根川のほとり

利根川のほとり

利根川のほとり

利根川のほとり

まゝをいふよし

さきふき雪のふりかへる

国境

提根村のいづれか  
ふらふらの柳の影の  
柳の影のさかすかに  
芽にほらさする雪の  
うららかな影の影の  
かやの影の影の影の  
葉の影の影の影の  
ふらふらの影の影の  
まがりの影の影の

春の影の影の

ふらふらの影の影の

まがりの影の影の  
雪の影の影の影の  
雪の影の影の影の

柳の影の影の影の

ふらふらの影の影の

柳の影の影の影の

雪の影の影の影の

大なる影の影の影の

いづれか影の影の影の

ふらふらの影の影の影の

雪の影の影の影の

ふらふらの影の影の影の

千住大橋

川下溜田川の水を

見渡す影の影の影の

柳の影の影の影の

都の影の影の影の

陽  
子  
の  
文

剥離紙片



形してはあつて湯治下  
に居る一々たるもの  
み成の別をわづらふ  
そふた

朋友對話

吾々の帰るべきは  
清く歸るべし

關南亭

其流

此方の西田を了るは  
老翁の在塔ありたもの  
杉一本を袖申すは  
の侍をわづらふ

世にや二人の年の  
の氣

中田はちよちよの  
を張くは

